

1905
シリーズ⑥
2005
百周年を
迎えて

高校の時に短期大学が開学すると知り、是非進学したいと思いました。先輩たちを見ていて、もうちょっと勉強したいと思っていたのです。子供の頃から縫い物が好きで、よくお人形に着物や洋服を縫って着せていたこともあり、被服コースへ進みました。本当は4年制大学がよくて、素三郎先生（初代学長の小林素三郎先生）に4年制を作って下さいと言ったら、名古屋ではまだ4年制は早いです。

当時は高校までで十分と考える親が大半でした。進学コースの優秀な同級生でも就職することが多く、短大へ進学した人は多くありません。その点、父母には感謝しています。

授業は毎日びっしりとありました。高校の時より忙しかったくらいです。被服コースは洋裁ではブラウスとスカパートから、最後はスーツまで作りしました。

短大の卒業式の式服はスーツでしたので、授業で自分で縫ったんです。和裁は赤ちゃんの産着から単衣、袴まで縫いました。できがよくないのでお嫁入り道具にはなりませんでしたが。

1期生でしたので、いろんなことが手探り状態でした。自分たちで好き

にクラブや同好会を作って、人を取り合ったり。私はワングル、写真、手芸、ダンスクラブなどをかけ持ちしていました。写真は高校からの延長で、学校の暗室で現像したり、撮影会にも行きました。

初めてのお化粧や、他大学との交流で出かけたダンスパーティーなど、驚くこともたくさんありましたね。学園祭は、ほかの大学のように遊びという感覚はなく真面目に取り組みました。学園祭当日に男の方が来ると、

神谷先生被服コース主任の神谷代子先生や今井先生（被服コース講師の今井和子先生が、「どんな男子学生なのか」と門のところでギョロツとにらんでいらっしやうたの覚えています。もちろん、担任の八橋徳太郎先生も（笑い）。

特に楽しかったのは修学旅行です。北海道へ10日間行きましたが、当時は短大で修学旅行というのは珍しかったですね。観光より汽車に乗っている時間の方が長かったのですが、札幌、層雲峡、釧路湿原、摩周湖、知床の方

まで結構回りました。ここでも先生方は、学生が男の人と話していないか目を光らせていました。

私は兄1人妹3人の5人兄弟の長女で、家が長者町で繊維卸の商売をしていたこともあり、高校の頃から食事の支度をしていました。当時としては普通のこと、勉強もいけどご飯の準備ができた上でのことと言われていたので、10日間も家を空けるとい

うのは大変でした。家政科は良妻賢母の育成が目的なので、短大で教えられたことは結婚してからずいぶん役に立ちました。台所といえは流しとおくどさん（かまこ）

の残っていた時代に、L字型がいいとかコの字型がいいとか、台所ではどういふ動線が一番効率のかというお話はすこく衝撃的でした。お作法やお料理、質の高い掃除や洗濯の仕方、電気配線の構造や直し方まで習ったんですよ。

学生の頃から染色が好きで、初めはろうけつ染め、今は天然染料を使う絞染めを20年続け、国内外の展覧会に出品して賞もいただいています。今は、趣味の染色を理解し、応援してくれる夫と二人暮らしで、好きなだけ打ち込めて幸せですね。（談）



愛知淑徳短期大学第1回卒業生
(昭和38年卒業)

伊藤 定子さん (旧姓:青木)

昭和17年生まれ。現在63歳。
愛知淑徳高等学校卒業後、愛知淑徳短期大学家政科被服コース入学。
短大卒業後、常磐女学園に進むが、4か月で自主退学。
昭和42年に結婚。
20年近く続けている絞り染めは、国内のほか韓国、中国、ロシア、ニューヨークなどで作品展を行っている。



被服コースの仲良しグループ4人と、今でいう卒業旅行で福島県の磐梯山へ。右から2番目が伊藤さん。スーツはすべて自作

短期大学1期生は全てが手探り状態。でも楽しく刺激的な学生生活を送りました。

1905年(明治38年)に設立された愛知淑徳学園は、今年100周年を迎えました。戦後、高等女学校から中学、高校へと変わった本学園は、昭和36年、短期大学を開学します。当初は最も要望の高かった家政科(被服と食物の2コース)のみで、39年に国文科、40年に英文科が設置されます。卒業生に学園での思い出を語っていたくシリーズの第6回は、短期大学第1回卒業生の伊藤定子さんにお話を伺いました。



昭和37年7月、研修旅行で訪れた山梨県の昇仙峡



伊藤さんの藍染めの作品「ゆらゆらと」(2002年)。江南市長賞受賞。